

## 匈奴の龍城について

松下憲一（愛知学院大学）

匈奴の祭祀について、司馬遷『史記』匈奴列伝に「歳正月、諸長は単于庭に小会し、祠る。五月、<sup>ろうじょう</sup>龍城に大会し、その先・天地・鬼神を祭る。秋、馬肥ゆるに、<sup>たいりん</sup>蹕林に大会し、人畜の計を課校す。」とあり、匈奴では正月、五月、秋の三回祭祀が行われていたと記されており、また祭祀の実施場所については、正月は単于庭、五月は龍城、秋は蹕林と書かれている。

匈奴の祭祀に関しては、江上波夫「匈奴の祭祀」（『ユウラシア古代北方文化』全国書房、1948年、再販、山川出版社、1950年）に詳細な研究がある。内容を要約すると、匈奴には春五月と秋九月の二回の大会があり、そのとき人々は自然の林木あるいは樹皮を立てたオボのような龍城（龍城・龍庭）に集まり、そこを<sup>じょうかい</sup>繞回し、祖先・天地・鬼神をまつり、人畜の数を調べ、国事を議論し、馬を走らせ、駱駝を闘わせて神楽とした。

祭祀の時期について、江上氏は春五月と秋九月の春秋二回とし、それは北方アジアの狩猟遊牧民の祭祀の通例であったことを、鮮卑・契丹・蒙古・満洲などの歴史上の事例のほか、近代におけるモンゴル、アルタイ地方のテリュート、カルムック、ヤクートの事例をあげて説明している。なお正月の単于庭での小会については、中国の制度を採用したものであるとしている。

また場所については、春秋ともに龍城（龍城・龍庭）に集まるとしているが、龍城は龍城とも書かれるのは、植物的材料による自然物あるいは営造物であったために、草や竹を龍に冠してその実体を表現したと説明しており、龍城はオボのような小規模な構造物で、その周りを巡回することを蹕林（林を<sup>めぐ</sup>蹕る）と言ったとし、秋の祭祀が行われる蹕林は地名ではなく、林（オボ）をめぐる行為を指すとす。

匈奴の祭祀について、正月の祭祀は中国の影響があった可能性があるが、五月と秋については、遊牧民の習俗にもとづくものである。江上氏は春五月と秋九月の春秋二回とし、五月、九月は中国の陰暦によったものであるとするが、陰暦の五月は仲夏にあたる。また秋九月について、『史記』匈奴列伝では秋と書かれているだけで、『後漢書』南匈奴伝に九月とあるのによって秋九月としているが、服虔『漢書音義』には「匈奴の秋社、八月中みな会祭する処」とあり、八月となっている。前漢時代にモンゴル高原にいた匈奴では秋の祭祀は秋八月に行われ、後漢時代、長城以南に移動した南匈奴になって秋九月に行なわれるようになったと考えられる。

さらに『史記』では龍城（籠城）となっているが、『漢書』では一か所龍城（籠城）とある以外はすべて龍城と書かれ、さらに『後漢書』では龍祠・龍会と表記されている。草冠・竹冠がなくなったことにより、匈奴における祭祀に龍神信仰があるという見解が、北魏の崔浩をはじめ中華民国の丁謙『漢書匈奴伝地理考証』（浙江図書館、1915年）などに見られるようになる。

龍・籠・龍はいずれも発音が *lóng* であることから同音異字として通用されたようだが、それぞれの字義は異なる。龍は「いぬだて（草の名）、草木のしげりおおうさま」。籠は「かご、こめる」。龍は「りゅう、王者、丘、まだら」。もともと胡語（匈奴語）を漢字で表記したものであれば字義には意味はないが、それなら司馬遷がわざわざ龍で表記する必要もない。司馬遷があえて龍を使用したのは、これが胡語ではなく漢語であったことを意味する。なお龍を籠とするのは書写の際、龍を籠に書き間違えたためで、龍の字が正しいと思われる。モンゴルに竹は自生しないため、江上氏が言うように植物的材料による営造物であったとすれば竹冠は適合しない。

班固が『史記』にもとづいて『漢書』（82年頃完成）を書くにあたり龍を籠に改めているが、班固

は永元元年（89年）の「燕然山銘」でも「老上の龍庭を焚く」と表記している。班固は老上単于の単于庭のことを龍庭と表記した。その認識が『漢書』でも採用され、龍を龍に改めたと考えられる。

『漢書』で龍を龍に改めたことで、『後漢書』南匈奴伝では「匈奴の俗、歳に三龍祠あり、天神を祭る」と匈奴における祭祀すべてが龍祠と表現されるに至った。その結果、北魏の崔浩が「西方の胡はみな龍神につかえる、故に大会の所を名づけて龍城となす」（『史記索隱』）と匈奴における祭祀に龍神が関係するという見解が生まれた。なお崔浩がいう西方の胡とは仏教のことである。駒井義明「前漢匈奴地名略攷」（『史林』第15巻第3号、1930年）は、西方の胡とはインドあたりのことと認めうるが、西方の胡ではない北方の匈奴につなげることはできない。さらに『史記』によれば龍城は祖先・天地・鬼神を祭る場所であって、龍神とはなんら関係ないとするように、匈奴には龍を祭る風習はない。

ここで改めて司馬遷が夏五月の祭祀を龍城と表記した理由を考えてみる必要がある。旧暦の夏五月は現在の感覚では六月頃にあたり、モンゴル高原では草が茂る時期で、遊牧民は夏営地に移動する。その時期に祭祀を行う場所を龍城と表現したと考えれば、龍の字は草木が茂るという意味がふさわしい。よって夏五月の夏営地における祭祀場は龍城 ろうじょう Steppe City であって 龍城 りゅうじょう Dragon City ではない。

補足として、『史記』匈奴列伝に「単于の庭、代・雲中に直る」とあるように、冒頓単于の時期の単于庭はゴビの南にあったと思われる。また『史記』巻108、韓長孺列伝「（元光六年＝前129年）車騎將軍衛青が匈奴を撃たんと上谷より出で胡の龍城を破る」とあることからすると、龍城も林幹『匈奴通史』（人民出版社、1986年。修訂版2022年）が内蒙古 シリンゴル 錫林郭勒盟の東、西烏珠穆沁旗付近と推定しているように内蒙古にあったと考えられる。

現在、龍城の候補地としてあげられているモンゴル国内の三連城やハルガン遺跡は、河川に面して開けた夏営地という立地条件としてはふさわしいが、使用された時期としては前漢武帝以降（前2世紀末）になるであろう。

#### <史料>

『史記』巻108、韓長孺列伝

車騎將軍衛青撃匈奴，出上谷，破胡龍城。（『集解』龍音龍。『索隱』音龍。）

『史記』巻110、匈奴列伝

歳正月，諸長小会単于庭，祠。五月，大会龍城（籠城），祭其先、天地、鬼神。秋，馬肥，大会蹕林，課校人畜計。（『索隱』漢書作龍城、亦作龍字。崔浩云、西方胡皆事龍神、故名大会処為龍城。後漢書云、匈奴俗、歳有三龍祠、祭天神。）

『史記』巻110、匈奴列伝

將軍衛青出上谷，至龍城，得胡首虜七百人。

『史記』巻111、衛將軍驃騎列伝

元光五年，青為車騎將軍，撃匈奴，出上谷；太僕公孫賀為輕車將軍，出雲中；大中大夫公孫敖為騎將軍，出代郡；衛尉李広為驍騎將軍，出雁門；軍各万騎。青至龍城（籠城），斬首虜数百。

『史記』巻112、平津侯主父列伝

嚴安上書曰、…今欲招南夷，朝夜郎，降羌僰，略濊州，建城邑，深入匈奴，燔其龍城，議者美之。此人臣之利也，非天下之長策也。（『索隱』匈奴城名、音龍。）

『漢書』巻6、武帝紀、元光六年（前129年）

匈奴入上谷，殺略吏民。遣車騎將軍衛青出上谷，騎將軍公孫敖出代，輕車將軍公孫賀出雲中，驍騎將軍李廣出雁門。青至**龍城**、獲首虜七百級。（応劭曰、匈奴单于祭天，大会諸国，名其処為**龍城**。）

『漢書』卷52、韓安国伝

而將軍衛青等擊匈奴，破**龍城**。明年，匈奴大入邊。語在青伝。

『漢書』卷54、李陵伝

陵至浚稽山，与单于相直，騎可三万圍陵軍……明日復戰，斬首三千余級。引兵東南，循故**龍城**道行，四五日，抵大沢葭葦中，虜從上風縱火，陵亦令軍中縱火以自救。

『漢書』卷55、衛青伝

元光六年，拜為車騎將軍，擊匈奴，出上谷；公孫賀為輕車將軍，出雲中、太中大夫公孫敖為騎將軍，出代郡、衛尉李廣為驍騎將軍，出雁門、軍各萬騎。青至**龍城**，斬首虜數百。（師古曰、龍説与龍同）

『漢書』卷64下、嚴安伝

今徇南夷，朝夜郎，降羌僰，略葭州，建城邑，深入匈奴，燔其**龍城**，議者美之。（師古曰、燔，燒也。龍城，匈奴祭天処。）

『漢書』卷94上、匈奴伝

歲正月，諸長小会单于庭，祠。五月，大会**龍城**，祭其先、天地、鬼神。秋，馬肥，大会蹕林，課校人畜計。

將軍衛青出上谷，至**龍城**，得胡首虜七百人。

壺衍鞮单于既立，風謂漢使者，言欲和親。左賢王、右谷蠡王以不得立怨望，率其衆欲南歸漢。恐不能自致，即脅盧屠王，欲与西降烏孫，謀擊匈奴。…於是二王去居其所，未嘗肯会**龍城**。（師古曰、各自居其本処，不復会**龍城**祭）。

虛閭權渠单于立九年死。自始立而黜顛渠閼氏，顛渠閼氏即与右賢王私通。右賢王会**龍城**而去，顛渠閼氏語以单于病甚，且勿遠。後數日，单于死。

『後漢書』卷23、竇憲伝

憲、秉遂登燕然山，去塞三千餘里，刻石勒功，紀漢威德，令班固作銘曰、……踰涿邪，跨安侯，乘燕然，躡冒頓之区落，焚老上之**龍庭**。（冒頓子稽粥號老上单于。匈奴五月大会**龍庭**，祭其先、天地、鬼神，今皆焚蕩之。）

『後漢書』卷23、竇章伝

贊曰、惘惘安豐，亦称才雄。提契河右，奉圖歸忠。孟孫明辺，伐北開西。憲実空漠，遠兵金山。聽笳**龍庭**，鏤石燕然。雖則折鼎，王靈以宣。

『後漢書』卷89、南匈奴伝

匈奴俗，歲有三**龍祠**，常以正月、五月、九月戊日祭天神。南单于既内附，兼祠漢帝，因会諸部，議国事，走馬及駱駝為樂。（前書曰、匈奴法、歲正月諸長小会单于庭祠、五月大会**龍城**、祭其先天地鬼神、八月大会蹕林、課校人畜計。）

願遣執金吾耿秉、度遼將軍鄧鴻及西河、雲中、五原、朔方、上郡太守并力而北，令北地、安定太守各屯要害，冀因聖帝威神，一舉平定。臣国成敗，要在今年。已勅諸部嚴兵馬，訖九月**龍祠**，悉集河上。唯陛下裁哀省察。太后以示耿秉。

論曰、…命竇憲、耿夔之徒，前後並進，皆用果譎，設奇數，異道同会，究掩其窟穴，躡北追奔三千餘里，遂破**龍祠**，焚鬪幕，阬十角，梏閼氏，銘功封石，倡呼而還。